

生きる力と自己実現



学習塾「早瀬道場」塾長 早瀬 憲太郎 先生

早瀬憲太郎と申します。手話では、このように表します。昨年まで NHK の「みんなの手話」の講師を 8 年間務めていました。18 年前に国語専門の学習塾を立ち上げて聾学校の子供たちや難聴学級の子供たちに国語を教えています。また社会人対象に日本語の指導も行っています。さて 20 年くらい前から全国各地の小学校に招かれ、4 年生から 6 年生くらいの健聴者の子供たちに話をしています。そこで必ず質問されることがあります。「耳が聞こえなくて困ったことはなんですか。」という質問です。そんなとき、私はいつも

「特にない。」と答えます。すると子供たちはとても驚きます。聞こえないことは大変なことだと思っているからです。きっと周りの大人が、そういうイメージを植え付けてしまっているからでしょう。そういうイメージを壊す仕事が私の役割だと思っています。

私の母は、常に手話で私にも話の内容が分かるようにしてくれました。夫婦げんかも学校からかかってきた電話も全て手話で表してくれるので、母の手話を見て自分に関係のないことだと思えば遊びを続け、学校からかかってきた電話で自分に都合が悪いことであれば部屋に逃げたりしていました。常に情報を自分で必要か必要ないか判断してきました。耳の聞こえない子供はたいていの場合「あなたには関係のない」と言われることが多いです。これを言われると次第に自分から聞こうとする気持ちが無くなり常に情報の必要性について親や周りが判断することに依存してしまうようになります。そして周りのコミュニケーションに関心がなくなる。これがとても怖いことです。私の場合は母の手話を見て、他者のコミュニケーションに関心をもち母が繋がっている人間関係を通して社会を知ることができたのです。耳の聞こえない子供の場合 1 対 1 のコミュニケーションはある程度できても、このように他者同士のコミュニケーションはどうしても分からず関心をもつことができません。そうするとコミュニケーションが周りとは繋がらない自己完結型となり広がることが出来ません。そうするとコミュニケーションをとりたいという気持ち、コミュニケーションの力が身に付かなくなってしまう。まず、家庭や学校の中で他者のコミュニケーションを受け止めてそれに関心をもち、楽しむことが大事であると思います。今私が人とコミュニケーションをとりたいという気持ちがあるのは母のおかげです。家庭での密接なコミュニケーションが、他の人の世界と自分の世界をつないでくれました。そのことで自分に自信をもち耳が聞こえないことに誇りをもつことができました。ですから私は聞こえない自分として生まれて良かったと思っています。そして私の母は、「聞こえない息子の感性に気付き、息子のおかげで色々な世界を知ることができた。産んでよかった。」と言ってくれました。耳の聞こえない子供たちにも、自分が聞こえないことが良かったと思える人生を歩んでほしいと思っています。そしてその親にも耳の聞こえない子を産んでよかったと思ってほしい。人生の中でこのような親子関係をつくれたことは幸せです。

難聴学級の先生との出会いについて話します。私たちは、相手が言ったことが分からないときは何度か聞き返しますが、そのときの相手のめんどうくさそうな態度に頼みにくい気持ちになることがあります。ましてや筆談は余計頼みにくいので分からないことも分かった振りをするのが身に付いてしまいがちです。耳が聞こえない私たちのことを理解してもらえないことに不満を抱きつつガマンしながらその場を取り繕おうとしてしまいます。よく周りの大人は「耳が聞こえないことを理解してもらおうことが大事」というのですが、具体的にどのようにすればいいのか私たちにとってはその方法が分からず悩んでしまうのです。そんなとき私がお世話になった難聴学級の先生に「理解してもらおうとするのではな

く、あなたが周りを理解するようにしなさい。聞こえる人は聞こえない人知らないのだから。」と言われたときは目からうろこが落ちたような気持ちになりました。健聴者の世界で生きていくためには理解してもらいよりもまず自分が健聴者のことを理解しようとするのが大切だということに気がきました。このように難聴学級の先生はあるときはそういった健聴者の代弁者としてその気持ちや考えを伝えてくれたり、あるときは私たちの代弁者となってくれたりしました。私たちと向き合うというよりも耳が聞こえない自分を受け止めあぐねている私たちに常に寄り添ってくれる存在でした。自分以外全員が健聴者という環境ではこのような先生の存在は親とは違う形での最初に信頼できる健聴者となりえます。

一方で、先生方は聾の大人と接する機会が少なく、子供の将来の見通しをもつために、もっとその世界を見ることが大切ではないかと思います。手話言語条例をご存知でしょうか。条例を制定した場所は、現在18ヶ所です。あまり知らない先生方が多いようですね。先生方には、子供たちに寄り添いつつも子供たちが将来どんな大人になっていくのか、どんな大人に育ててほしいのか明確なビジョンをもってほしいと思います。そのために聾者に会って世界を知ってほしい、手話を覚えて聾者とコミュニケーションをとるなかで、今のろう者たちの社会における状況を受け止め、その上で耳の聞こえない子供たちに何を伝えられるか、どのように寄り添っていきけるかを考えてほしいと願っています。

東日本大震災の映画「命のことづけ」を製作しました。震災ではたくさんの障害者が亡くなりました。情報が入らず逃げることができなかった聴覚障害者がたくさんいました。そのことを多くの人に知ってもらい耳の聞こえない子供たちの命を守るために映画を製作しました。助かった聴覚障害者の多くは普段から地域の人と関わりがあり地震が起きたときにその情報を近所の人に教えてもらっていました。耳が聞こえないことを周囲にアピールすることは大事です。その情報をもって町内にいる身体障害者の家に行って車いすの方を助けにいった聴覚障害者がいました。助けてもらう存在だけではなく自分が地域の一員として社会の一員として情報がきちんと入れれば周りを助けることができることをしっかりと証明したのです。社会のために自分に何ができるのか。社会の一員として、社会に必要とされる存在になるにはどうすればよいか。そのような大人に育てるにはどうしたらいいか？これを先生方には是非今受けもっている生徒たちと一緒に考えていってほしいと思います。

私の趣味は、自転車です。2年前にブルガリアで行われたデフリンピックに出場したときのことで。このとき私の妻はメダルを取りました。大会を終えて家に帰ってきたら、家の近くの道に「銅メダル獲得おめでとう」という大きな横断幕が掲げてありました。地域の方が用意してくれたのです。地域の方とこのような関係を作れたことが本当に嬉しかったです。耳の聞こえない子供たちはこの横断幕のことをとてもびっくりして自分もいつかこのように横断幕を作ってもらいたいと目を輝かせて話してくれました。耳の聞こえない子供たちが自分の将来にビジョンをもつためには、家庭の中で周りとのコミュニケーションにつながるができる環境、耳の聞こえない世界のことを知っていて常に寄り添う先生方の存在、そして自分と同じ耳の聞こえない大人たちの生き様を子供たちが知る機会、の3つが必要でありこれが生きる力に繋がっていくのだと思います。